

## O-1-12 海外で埋入された残存インプラントを支台とした上顎IODの1症例

## A case of maxillary IOD using remaining implants placed overseas as abutments

○菊地 開斗<sup>1,2)</sup>, 喜久田 吉蔵<sup>1,2)</sup>, 郡 啓介<sup>1,2)</sup>, 佐々木 恵利<sup>2)</sup>, 栗原 大介<sup>1,2)</sup>, 鈴木 恭典<sup>1,2)</sup>, 大久保 力廣<sup>1,2)</sup>  
 ○KIKUCHI K<sup>1,2)</sup>, KIKUTA K<sup>1,2)</sup>, KOHRI K<sup>1,2)</sup>, SASAKI E<sup>2)</sup>, KURIHARA D<sup>1,2)</sup>, SUZUKI Y<sup>1,2)</sup>, OHKUBO C<sup>1,2)</sup>

<sup>1)</sup> 鶴見大学歯学部口腔リハビリテーション補綴学講座

<sup>2)</sup> 鶴見大学歯学部附属病院インプラントセンター

<sup>1)</sup> Department of Oral Rehabilitation and Prosthodontics, Tsurumi University School of Dental Medicine

<sup>2)</sup> Center of Maxillofacial Implantology, Tsurumi University School of Dental Medicine

I 目的： インプラント治療の普及により患者に埋入されるインプラントのメーカーは多岐にわたる。本症例では海外で埋入されたインプラントに対し、カスタムメイドキーパーを製作し装着した結果、既存のインプラントを有効利用し、高い満足を得ることができたので報告する。

II 症例の概要： 患者は67歳、女性。海外にて治療された上顎インプラント固定性補綴装置の不具合を主訴に来院した。初診時431+23にインプラントが埋入されていたが、国内に流通するインプラント体と形状が異なり、インプラントメーカーの特定が困難であった。唯一の手掛かりとなるインプラントプラットホームの形状とパノラマエックス線画像より適合するアバットメントを推定し、入手可能な他メーカーのマルチユニットアバットメントを流用してカスタムメイドのマグネットアタッチメントを製作した。予後不良のL2部のインプラント体を除去したこともあり、装着当初は口蓋を被覆するインプラントオーバーデンチャー(IOD)としていたが、最終的にはマグネットアタッチメント装着後に口蓋部を削除し、馬蹄形のインプラントオーバーデンチャーとした。

III 経過： 2025年9月現在、431+3を支台としたカスタムマ

グネットアタッチメントを用いたインプラントオーバーデンチャーは意図したとおりの機能を發揮し、問題なく使用できている。また、口腔内に異常所見は確認されず、エックス線写真においても顕著な骨吸収像やインプラント周囲炎等の異常所見は観察されなかったことから、経過良好と判断した。患者は、機能的・審美的にも十分満足している。現在は定期的なリコールを行い、残存インプラントを中心に慎重に経過を観察している。

IV 考察および結論： 既存のインプラントメーカーが不明の場合、インプラント上部構造を再製作する際に必要なインプラントパーツの入手が困難な場合が多い。本症例では既存インプラントと適合する他社製インプラントパーツを使用することで、最小限のコストで既存インプラントを最大限有効活用することができた。今回製作したカスタムメイドマグネットアタッチメントは、既製品のような性能が発揮されないことが危惧されたが、最終的には装着感に優れ、患者からも高い満足を得ることができた。今後も定期的なメインテナンスを実施し、慎重に予後の観察を行う予定である。(本治療はインフォームドコンセントを得て実施した。また、発表についても患者の同意を得た。)

## O-1-13 CBCTの画素値によるインプラント周囲骨の経年的変化

## Longitudinal changes in peri-implant bone by CBCT pixel values

○藤本 正一郎<sup>1)</sup>, 荒井 直己<sup>2)</sup>, 鈴木 泰二<sup>1)</sup>, 牧 浩壽<sup>1)</sup>, 鯨岡 創一郎<sup>1)</sup>, 井畠 秀久<sup>1)</sup>, 奥寺 俊允<sup>1)</sup>, 奥寺 元<sup>1)</sup>  
 ○FUJIMOTO M<sup>1)</sup>, ARAI N<sup>2)</sup>, SUZUKI T<sup>1)</sup>, MAKI H<sup>1)</sup>, KUJIROKA S<sup>1)</sup>, IBATA H<sup>1)</sup>, OKUDERA T<sup>1)</sup>, OKUDERA H<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 東京形成歯科研究会, <sup>2)</sup> 関東甲信越支部

<sup>1)</sup> TOKYO PLASTIC DENTAL SOCIETY, <sup>2)</sup> Kanto-Koshinetsu Branch

I 目的： インプラント治療では咀嚼機能や審美性の回復が主目的とされるが、その長期的成功には周囲骨の安定的保全が不可欠である。また、単に咀嚼向上や異物感軽減だけではなく、骨内部の代謝に影響を与えると思われる。近年、組織学的研究やCBCT解析を通じた骨質評価の報告が増えている。本研究では、インプラント埋入直後から経年的にCBCT画素値を比較し、骨成熟や石灰化の進行を定量的に検討することを目的とした。

II 材料および方法： 対象はインプラント治療を受けた患者(男女、30～76歳)。埋入直後および1～8年後の経年的観察時に、CT-i 3D撮影機(PAX Vatect社、京セラ社販売、東京)で撮影したCBCTデータ(骨密度画素値観察)を過去に撮影した物を収集した(後ろ向きデータ)。アクシャル断面において、インプラント部の外側の骨画素値を抽出し、埋入直後からの経年的変化を比較分析した。

III 結果： インプラント周囲骨の画素値は埋入直後の平均 $1548.6 \pm 227.8\text{pixel}$ から、経年後(平均4.19年) $1622.1 \pm 235.2\text{pixel}$ へと上昇した。平均差は $+73.5 \pm 126.8\text{pixel}$ であり、統計学的に有意な増加が認められた( $t(17) = 2.46$ ,  $p = 0.024$ ,

効果量 0.58)。これは骨の石灰化進行や成熟度の上昇を反映していると考えられた。

IV 考察および結論： CBCT画素値の経年的変化を追跡することは、インプラント周囲骨の成熟過程を非侵襲的かつ定量的に評価する有効な方法である。インプラント埋入し咬合負荷を与える事により、骨代謝が向上されると思われ、画素値増加が起こる、長期的なインプラント予後の客観的評価に有用な指標となり得ることが示唆された。

(倫理審査委員番号 17000114 承認 承認番号 25301 番)